

コンラッドの『闇の奥』における非現実化

照 屋 由 佳

序

フレドリック・ジェイムソンによると、『ロード・ジム』(*Lord Jim*, 1900)における社会的・歴史的内容を非現実化し、この作品を純粹に審美的レベルで消費しうる一個の商品に変化させてしまうのはコンラッドのモダニスト的、印象主義的戦略(現実的なものを精巧な文体へと変容させるプロセス)である⁽¹⁾。これから取り扱うことになる『闇の奥』(*Heart of Darkness*, 1899)においても、同様に社会的・歴史的内容(反植民地主義・反帝国主義)を空洞化する要素が存在している(コンラッドの印象主義的なスタイルへの意志はそのうちの一つであろう)。コンラッドが、西欧社会の暗黒面、植民地における白人社会の頹廢への鋭い洞察力を示しながら、そうした社会的内容を非現実化し、審美化戦略などによって、望ましからざる現実を効果的にずらしてしまう⁽²⁾のは彼の政治的反動性が一因として挙げられよう。以下、『闇の奥』におけるこうした社会的内容、及びそれを非現実化し、空洞化する要素について取りあげてみたいと思う。

1

この作品における社会的・歴史的内容を非現実化する要素はこの作品のテーマと密接に絡み合っている。というのも、コンラッドはこの作品で植民地主義・帝国主義批判を行っているのであるが、コンラッドの原住民の描き方自体に問題が無いとは言えないからである。つまり、原住民を自然と一体になっているとか、肉体労働に適していると述べたり、「野蛮人」(‘savages’) と呼び、アフリカにヨーロッパの他者のイメージを投影し、アフリカを非文明の世界、人類の知性が獣性に嘲られる世界と描写するだけではなく、暗黒、悪、地獄のイメージで述べることは本質主義のみならず、人種差別主義と呼ばれても仕方のないことなのである⁽³⁾。もちろん、コンラッドの原住民の描き方が人種差別的であるのは、彼がロマンスの約 束 事^{コンヴェンション}を用いているということで、ある程度擁護できるかもしれない。主人公が魔法や悪魔の国に行き、怪物を退治し、暗黒の世界に光をもたらし、もとの光の国に戻るという探究ロマンス (‘quest romance’) の約 束 事^{コンヴェンション}を当時のアフリカの冒険家や宣教師達は自らの著作の中で使ったのである。彼らの著作の中で主人公はいつも暗黒の軍団と戦う白人の聖人=光をもたらし者であり、悪魔の国はアフリカ大陸であり、怪物退治はナイル川の源を見つけることや、悪魔=原住民に共食いの風習を止めさせ、キリスト教の光を与えることである。もちろん、光の国とはイギリスなどの文明国を指している⁽⁴⁾。コンラッドはマーローがアフリカ大陸に光をもたらしることができない（征服できない）ばかりか、巨大な荒野の闇の力をやっとのことで「悪魔払い」⁽⁵⁾する姿を描くことで、ロマンスの約 束 事^{コンヴェンション}や冒険家達の著作を批判している。コンラッドの新しい点は闇をアフリカ大陸や原住民の風

習、すなわち〈外側〉のみならず、文明人の〈内側〉やロンドンに置いていることである。この作品の冒頭と最後でロンドンが闇に覆われていくことを強調するのはそういう意味であろう。しかしそれと同時にコンラッドはロマンスの約 束 事ヨングェンツォンを用いることで、暗闇と悪と野蛮をアフリカと結びつけ、光と善と文明を西洋と結びつけている。つまりコンラッドは帝国主義を擁護する探究ロマンスの批判をしていると同時に、そうしたジャンルの偉大な作家の一人なのである⁶⁹。いかにこの作品が反植民地主義を第一のテーマとして掲げようとして、その批判の仕方が人種差別的、帝国主義的であり、他の冒険家達の著作と一緒にアフリカ＝暗黒というイメージに寄与する言説、つまりアフリカ大陸は暗黒であるという神話の形成に役立っている以上⁷⁰、この作品には矛盾が付きまとう。

2

コンラッドの二重性に留意しながら、この作品の反植民地主義のテーマに注目してみよう。周知のように、植民地主義者、博愛主義者は、この世に色々な社会発展の段階が存在しているが、唯一の文明、唯一正しい宗教、進化に向かう一つの道が存在すると考え、アフリカ人に産業とキリスト教の光を教え、野蛮や未開の状態から救うことを義務とした。しかし、この作品が批判しているのは、まさしくそうした植民地主義者、博愛主義者の考え方に他ならないのである。そして植民地主義者、宣教師の行為を正当化したのが、人は野蛮・未開から文明という社会段階を通して進化し、進化のためには後進的な民族は文明化された進歩的な民族によって支配されなければならないとする社会ダーウィニズムである。しかしそのような社会ダーウィニズムの行き着く先は、アフリカ大陸に光をもたらすためには

劣った民族を殺す、いや劣った民族は生存競争のプロセスで必然的に消滅するのであるから、劣った民族を文明から排除しなければならない、生存競争に勝つためには民族は単一でなければならないとする優生学である⁽⁸⁾。優生学とナチスのファシズムが近い位置にいることは一目瞭然であろう。この観点から見れば、クルツの国際蛮習防止協会の報告書の後記に見られる‘Exterminate all the brutes’⁽⁹⁾ (p. 72) という表現は植民地主義、社会ダーウィニズムの行き着く先であるとも言える。教化し、光を与えるという植民地主義のペテンはマーローが目撃したヨーロッパのアフリカ搾取という残虐性によって暴露され、社会ダーウィニズムの批判は主にクルツの墮落によって表される。もとより両者は厳密に分離できぬものであるが、前者はこの作品の反植民地主義の表層の部分、後者は深層の部分を表していると言える。両者を結びつけるのはもちろん、進化という概念である。

3

前者の表層的な植民地主義の批判は「能率主義」(‘efficiency’) と「観念」(‘idea’) の基準で行われる。この基準はコンラッドのものではなく、当時、イギリスに広く受け入れられていた社会ダーウィニズムが推進した価値観である。コンラッドが目撃したコンゴのレオポルド二世による残忍な支配——この作品のモデルである——を批判するのに有効性と観念の基準は適していたのである。だから有効的な他の植民地についてコンラッドがどう思っていたかは曖昧である。特に、イギリスの植民地については賞賛していた節がある。この有効性と観念の基準はイギリス人に自己批判を起こさせずに、他の植民地の残虐性について目を向けさせる戦略であるとも言える⁽¹⁰⁾。レオポルド二世の植民地経営の特徴は一言で言えば、非能率性であ

る。コンゴの当時の状況はこの作品の中に色々と反映されている。鉄鎖で繋がれた原住民はレオポルド二世の強制労働のシステムを表しているのだろうし、マーロー達が雇った原住民に棒給として与えられる真鍮の針金が何の役にも立たないことは基準となる通貨体系が不在であったという事実と言及しているのであろう。またレオポルド二世の非能率的な帝国主義は草原に転がっているボイラー、車輪の一つが飛んでしまったトロッコ、鉄道を敷くために、邪魔にもなっていない断崖に無目的にハッパをかけるがなんの変化も現れないことに表されている⁽¹¹⁾。マーローが観念、つまり理想を信頼していないことは彼の伯母と違って、無知な野蛮人を教化し、光を与えるという植民地主義の理想のペテンを見抜いていることから窺われる。クルツはそうした理想を実現するためにアフリカに出かけたのであるが、彼の墮落を見れば、いかにそうした理想がアフリカでは役に立たないことが分かるであろう。マーローはそうした観念について次のように述べている。

‘He must meet that truth with his own true stuff — with his own inborn strength. Principles won’t do. Acquisitions, clothes, pretty rags — rags that would fly off at the first good shake.’
(p. 52)

後天的に得た主義、信念、道義、自制心、つまり観念は「始めの一振りで飛んでいってしまうぼろつきに過ぎない」のである。野蛮人を教化し、キリスト教や産業といった光を与えるという理想の下でいかに残酷な搾取が行われていたかは、数々の暗黒や死のイメージ（その象徴は役に立たなくなった原住民が死を待っている死者の森である）、クルツが自分に齒向かった原住民の首を小屋の前の杭の上に飾るという行為などに表れている。また能率性についても、支配人が最終的にクルツを会社の能率性とい

う基準（会社のためになったか、害になったか）で批判した時、クルツの側に立つことにより、マーローは能率主義という基準も否定しているのである⁽¹²⁾。

4

深層のレベルにおける植民地主義批判とも関連を持つことにもなるのだが、この作品には縦のイメージが氾濫している。その代表的なのがテムズ川であろう。川は普通、横のイメージであるが、コンラッドは川に歴史性を刻印することによって、縦のイメージで用いている。テムズ川はローマの支配に始まって、16世紀のフランシス・ドレイク、19世紀の探検家のジョン・フランクリンや、東洋貿易の商人達や東インド会社の新將軍達の船出、帝国の萌芽を見送ってきたのである。このテムズ川がイギリスの歴史そのものであり、進化の象徴であるとすれば、クルツが住んでいる出張所に行くために使うアフリカの川は、‘Going up that river was like travelling back to the earliest beginnings of the world’ (p.48) という言葉から明らかなように、進化とは反対の退化のイメージなのである。これこそアフリカ大陸の闇の奥でクルツに起こったことであり⁽¹³⁾、社会ダーウィニズムに対する痛烈な批判である。マーローが大陸の奥に行くにつれ、周囲は「先史時代の地球」(‘prehistoric earth’), 「原始の夜」(‘the night of first ages’) となり、原住民は「先史時代人」(‘prehistoric man’) の様相を呈してくる。

当初、クルツはヨーロッパの理想、最高の価値観の具現であり、文明や光、同情、進化、科学の使者として出発した。クルツは支配人に ‘Each station should be like a beacon on the road towards better things,

a centre for trade of course, but also for humanizing, improving, instructing' (p. 47) と述べ、彼を困惑させている。ここには、「光」「進歩」「文明」「教化」といった植民地主義の理想が詰め込まれている。このクルツが周りの景色が現代から先史のものになるにつれ、退化してしまったのである。コンラッドにとって残虐性は原住民の共食いや人間を生贄に捧げるといった風習、すなわちヨーロッパ人の〈外側〉ではなく、クルツが野蛮人になってしまうこと、ヨーロッパ人の〈内側〉にある。白人が進んだ優れた民族ではなく、西洋文明の理想を裏切り、文明の束縛を捨て、欲情と残酷さを特徴とする野蛮人になってしまうことをクルツは証明したのである（当時、アフリカ大陸で野蛮人になってしまう文明人はいくらかもいた）。クルツが野蛮人になってしまったことは彼の象牙に対する貪欲さ、原住民の首を飾ったことや、彼の欲情、彼を神とする「口にすることも恐ろしい祭式」に参加していることから明らかであろう。原住民の蛮習（偶像崇拜）が闇（'darkness'）であり、墮落しているとしても、コンラッドは偶像崇拜のフェティシズムを普遍化させることにより、闇を普遍化させ、文明人も原住民同様、墮落していることを示す。クルツを偶像崇拜している原住民のみならず、象牙、お金、名声、権力を崇拜している巡礼達、自己の権力と欲情の自画像（神）を崇拜しているクルツ、異教の偶像の姿勢をとりながら話すマーロー、クルツを神と崇めているロシア人、婚約者の理想像を偶像崇拜しているクルツの婚約者、すべてフェティシズムである⁽¹⁴⁾。なぜなら新の闇、墮落は文明人の中に存在しているからである。クルツが荒野の闇の力に負けて、野蛮人化するにしても、それはもともとクルツの内側に潜んでいたものに他ならない⁽¹⁵⁾。

'But the wilderness had founded him out early, and had taken on him a terrible vengeance for the fantastic invasion. I think

it had whispered to him things about himself which he did not know, things of which he had no conception till he took counsel with this great solitude—and the whisper had proved irresistibly fascinating. (p.83)

文明社会の中では抑圧しなければならない、いや気付きもしない自分の中の野蛮な衝動に、クルツは敗北する。真の闇（darkness）とは自分の内に潜んでいるのである。原住民の中にある共食いや欲情の風習、墮落、偶像崇拜を見出し、批判するが、それは文明人の内側に存在していたものであり、自己の奥の野蛮な衝動や無意識を原住民に投影していただけである。白人は原住民の風習を直したいという文明人の理想と自己の内にある野蛮な衝動を発散させ、彼らと同化したいという欲望とに引き裂かれ、クルツや他の野蛮人化した白人は後者に屈したのである⁽¹⁶⁾。そう考えてみると、クルツの国際蛮習防止協会の報告書の後記に見られる ‘Exterminate all the brutes’ という表現は自分の中の野蛮な衝動のことに言及しているとも言えるのである。

5

マーローですら自己の内の野蛮な本能を知覚している。

‘Well, you know, that was the worst of it—this suspicion of their not being inhuman. It would come slowly to one. They howled and leaped and spun, and made horrid faces; but what thrilled you was just the thought of your remote kinship with this wild and passionate uproar. Ugly. Yes it was ugly enough; but if you were man enough you would admit to yourself that there was in you just the faintest trace of a response to the

terrible frankness of that noise, a dim suspicion of there being a meaning in it which you—you so remote from the night of first ages—could comprehend.’ (pp. 51-2)

確かに社会ダーウィニズムの教える通り、文明人と叫び、踊り狂っている野蛮人との間には繋がり、血縁関係がある、彼らは同種なのである。しかし文明人は原始の闇からあまりにも遠ざかっているわけではない、それはクルツが証明してくれる。文明とは余りにも軽すぎる外套なのである。マーローは荒野に嫌悪と同時に魅惑を感じているが、自分の中の野蛮な本能と文明との戦いに彼がどちらにくみしているかは一目瞭然である。

‘I tried to break the spell—the heavy, mute spell of wilderness—that seemed to draw him to its pitiless breast by the awakening of forgotten and brutal instincts, by the memory of gratified and monstrous passions.’ (pp. 94-5)

マーローは自分の中の「野獣の本能」を「生まれながらの力」や皮相的な現実に関することにより、抑圧しようとする。自分の中の闇の力を自覚し、闇の真実を知りながら、クルツの婚約者に虚偽の文明に最適の嘘という方法を使うことによって、彼女を自分の中の闇（‘darkness’）の真実を悪魔扱いするために利用し、欺瞞の文明に回帰していく。真実を知りながら、それを遠ざけてしまうこのマーローの身振りは社会的・歴史的内容を記しておきながら、それを非現実化してしまうこの作品の身振りと重なり合う。この作品の中心に位置する「空虚な’（hollow）’クルツがこの作品の中心が、テーマを空洞化しているが故に空虚であることを示しているのと同様に¹⁷⁾、マーローのこの最後の身振りは、この作品がロマンスの約束^{コンヴェンション}事の使用や印象主義的文体の戦略によって、社会的・歴史的 content（植民地主

義・帝国主義批判のテーマ）を非現実化し、空洞化していることを自意識的に宣言しているのである。

註

- (1) Fredric Jameson, *The Political Unconscious: as a Socially Symbolic Act* (Ithaca: Cornell University Press, 1981) p. 214.
- (2) Ibid., p. 217, p. 230.
- (3) Cf. Patrick Brantlinger, 'Epilogue: Kurtz's "Darkness" and Conrad's *Heart of Darkness*' in his *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830-1914* (Ithaca: Cornell University Press, 1988) pp. 255-7, p. 262.
- (4) Cf. Brantlinger, 'Victorians and Africans: The Genealogy of the Myth of the Dark Continent' in "*Race*", *Writing and Difference*, ed. Henry Louis Gates (Chicago: The University of Chicago Press, 1986) pp. 195-7.
- (5) R. A. Gekoski, *Conrad: The Moral World of the Novelist* (London: Paul Elek, 1978) p. 89.
- (6) Cf. Brantlinger, 'Epilogue: Kurtz's "Darkness"', pp. 262-5.
- (7) Brantlinger の 'Victorians and Africans' によると、1830 年頃まではアフリカ人を高貴なる野蛮人として描き、アフリカを牧歌的自由のイメージで描き、彼らの風習や芸術に賞賛を払ったが、アフリカの搾取に乗り出し、イギリス人がアフリカにいる口実の必要性が出てくるにつれ、アフリカは野蛮と偶像崇拜と共食いの墮落した世界として描かれるようになったのである。つまり、アフリカ＝暗黒大陸といった神話はヴィクトリア朝の虚構に他ならない (Cf. pp. 189-217)。
- (8) Cf. Ibid., p. 185, pp. 195-208.
- (9) テキストは次の版を使用。Joseph Conrad, *Heart of Darkness* (Harmondsworth: Penguin Books, 1973) 本文中の括弧内の頁付けはこの版による。
- (10) Cf. Hunt Hawkins, 'Conrad's Critique of Imperialism in *Heart of Darkness*', *PMLA* 94 (1979) p. 288.
- (11) Cf. Ibid., pp. 288-95. また Brantlinger の 'Epilogue: Kurtz's "Dark-

ness”によると、強制労働のシステムを始めとするレオポルド二世の最も残虐な支配はコンラッドがイギリスに帰ってからのことであり、コンラッドはレオポルド二世の残虐な植民地支配を暴露する数々の本を読み、この作品に反映させたのである（p. 259）。

- (12) Hawkins, p. 295.
- (13) Brantlinger, 'Victorians and Africans', p. 212.
- (14) Ibid., pp. 212-5.
- (15) Ibid., pp. 213-5.
- (16) Ibid., p. 215.
- (17) Brantlinger, 'Epilogue: Kurtz's "Darkness"', pp. 271-2.

（人文科学研究科 博士後期課程 イギリス文学専攻）